台湾の「海女（ハイルー）」に関する民族誌的研究

――東アジア・環太平洋地域の海女研究構築を目指して――

期間：2018 年 4 月 1 日～2022 年 3 月 31 日
［共同研究者］
藍紹芸（台湾基隆市八斗子漁村文物館）
新垣夢乃（東京福祉大学）
許焜山（台湾基隆市八斗子漁村文物館）
［代表者］藤川美代子（南山大学）
齋藤典子（東洋大学）
沈得隆（台湾基隆市八斗子漁村文物館）
兪鳴奇（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）
安室　知（日本常民文化研究所）

研究の目的および 2018 年度の活動報告

研究代表者　藤川　美代子

写真１　木製の水中眼鏡と自家製のマスクをつけて海に潜る
（澳底／沈得隆撮影　2018 年７月）

写真２　紫色の石花菜は水洗いと天日干しを６回ほどくり返すと白くなる（龍洞／藤川美代子撮影　2019 年３月）

本共同研究が注目するのは、台湾で「海女（ハイルー）」と呼ばれる女性たちとその暮らしである。台湾各地の海沿いには広く「海女の民俗」が存在する。しかし、１）農本主義的傾向の強い漢族研究では、海を生業の場とする人々の存在自体が等閑視されるほか、２）東アジア研究では「海女といえば日本か韓国済州島」との先入観が存続しつづけており、台湾の海女はこれら二重の意味で見落とされてきた存在といえる。

こうした背景を踏まえて本研究では、１）台湾の海付きの村を対象に、海女の潜水漁・海藻の手繰り寄せ・その他の漁撈活動をめぐる民族誌的調査を実施し、それを「村のくらし」全体の中に位置づけて描くこと、２）漢族研究の文脈で台湾の海女民俗を捉えるための視座を獲得すること、その上で３）台湾の事例を日本の海付きの村と比較しながら、東アジアあるいは環太平洋島嶼部全体を射程に入れた新たな形の「アマ研究」模索のための足がかりを摑むことを目指している。

初年の2018年度は予備調査を経て、基隆市・新北市にまたがる通称「台湾北部・東北角」の海岸線一帯における海女文化を本研究の主な対象とすることを決定した。夏季・春季現地調査では、次のような課題について基礎的なデータを収集することに努めた。1）日常の文脈から乖離する「海女」という呼称とあるべき「海女」像、2）沖縄と台湾の潜水技術をつなぐ歴史、3）各世帯の生計に見る家族の役割分担、4）家族の歴史と潜水技術の習得・継承、5）海・磯の空間認識と海藻類・貝類の分類・利用法をめぐる民俗知識、6）潜水漁を可能にする道具の構造と職人の技術、7）「よい石花菜（＝テングサ科の総称）とは何か」をめぐる個々のアクター間の言説の相違とそれを支える価値観、8）テングサの販路から見える世界とのつながり、9）海洋資源枯渇と保護をめぐる複数の物語、10）海の危険を回避するための民俗的叡智。これらの課題を踏まえ、歴史的背景の解明ならびに海藻・貝類の潜水漁を対象とした比較研究のために、沖縄県内数カ所での資料調査・現地調査も並行して実施した。

写真３　海中で石花菜を採る女性（龍洞／許焜山撮影　2018年６月）

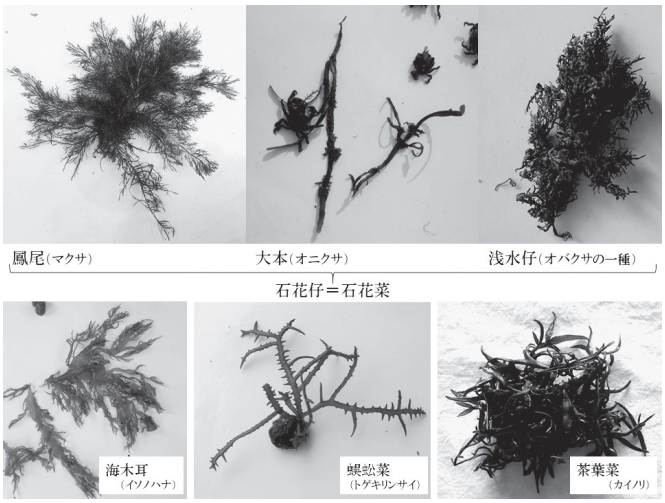

写真４　台湾東北角で採れる海藻類（フォークタームは話者によって差異が認められる）

今後も各課題の追究に努めるほか、潜水漁の対象物である海藻類・貝類の種類の同定、あるいは海藻の工業利用（＝多糖類を抽出し、食品・化粧品・医薬品・塗料などに用いる）の把握などについて、理系研究者にも協力を仰ぎながら、ミクロ・マクロ両面から台湾の海女文化を捉えることを目指したい。

■2018年度の活動

○2018年度第1回共同研究会　2018年5月14日
　南山大学人類学研究所　藤川美代子・新垣夢乃・齋藤典子・兪鳴奇
○台湾予備調査　2018年7月29日～8月5日
　台湾台北市、基隆市、新北市　藤川美代子・新垣夢乃・齋藤典子・許焜山・沈得隆・藍紹芸
○内間長三氏に関する追跡調査　2018年8月7日～10日　沖縄県久高島　新垣夢乃
○台湾の海女に関する資料・現地調査　2018年8月16日～9月3日
　台湾台北市、基隆市、新北市　藤川美代子・齋藤典子・兪鳴奇・許焜山・沈得隆・藍紹芸、王麗香（通訳）
○沖縄の海藻・貝類採取ならびに潜水技術の伝播に関する現地調査　2019年3月4日～9日
　沖縄本島、久高島　藤川美代子・兪鳴奇・許焜山
○台湾てんぐさ漁調査　2019年3月25日～4月1日　台湾台北市、基隆市、新北市貢寮区龍洞、新北市貢寮区和美、新北市貢寮区澳底　藤川美代子・斎藤典子・新垣夢乃・許焜山・沈得隆・藍紹芸